天下統一の拠点とした岐阜 信長公が最も輝いていた時代

南から眺めた
金華山山頂部と岐阜城天守閣

永禄10年（1567）9月、信長公は金華山の頂上から濃尾平野を眺めることができました。34歳の時です。信長公の義父、斎藤道三公が息子・義龍と争って敗れた弘治2年（1556）、信長公は道三公を救援するため、金華山を目指して兵を北上させたことがあります。それから11年が過ぎていました。

信長公はすぐさま、本拠地を小牧からこの地へ移すことを決断します。金華山の西麓に広がる城下町は、城攻めの際焼き払われてしまいましたが、信長公の正室が道三公の娘であったため、斎藤家の有能な臣下たちをリクルートすることができ、また、井口（いのくち）の住民たちの目にも全くこの地に縁がない侵略者として映らなかったため、すぐさま新しい町づくりに取り組むことができたのです。

天正4年（1576）2月、築城途上の安土へ移るまでの9年間、信長公は岐阜を拠点に天下へはばたきました。岐阜入城の翌年には足利義昭を奉じて上洛、その後朝倉氏・浅井氏との戦いを経て、天正3年（1575）には武田勝頼を長篠で破りました。信長公はその生涯で最も輝いていた時代を岐阜で過ごしたのです。

信長公が安土へ移った後も、岐阜は織田家の家督を譲られた信忠の居城でした。信長公もたびたび岐阜に戻ってきており、岐阜城の蔵には豊富な軍資金が蓄えられていました。岐阜は織田家にとって重要な拠点であり続けたのです。

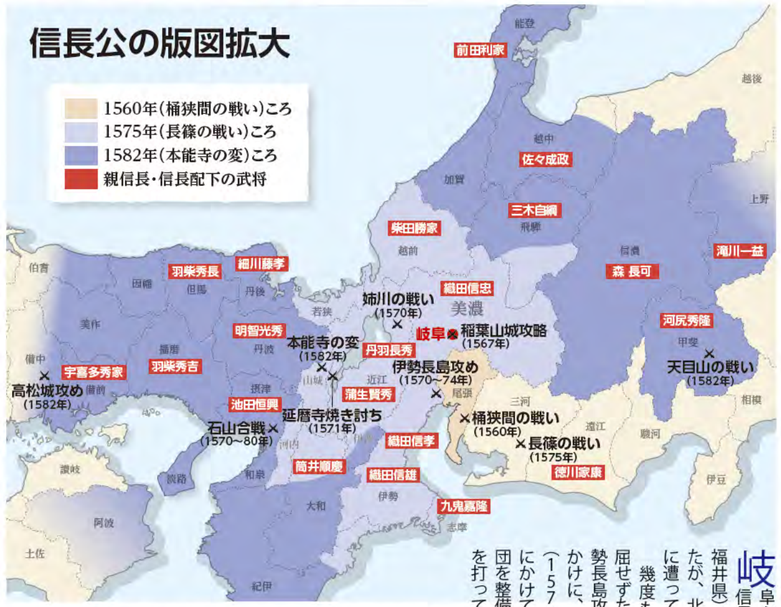
信長公の足跡（年表）

年月	出来事
天文3年（1534）5月	尾張で生誕
天文18年（1549）	斎藤道三の娘（濃姫）、信長に嫁ぐ
天文23年（1554）5月	那古野城から清洲城へ移る
弘治2年（1556）4月	道三、息子の義龍と争い敗死 信長も出兵する
永禄4年（1561）5月	斎藤義龍急逝。信長、美濃攻略を本格化する
永禄6年（1563）2月	小牧山に築城を開始する
永禄10年（1567）9月	斎藤龍興を伊勢長島に追い、信長、岐阜に入城する
10月	楽市楽座制札を出す
11月	天下布武印を使い始める
永禄11年（1568）9月	足利義昭を奉じて上洛
元亀元年（1570）6月	信長・徳川家康連合軍、朝倉義景・浅井長政連合軍と姉川で戦う
元亀2年（1571）9月	比叡山延暦寺を焼き討ちする
天正元年（1573）7月	足利義昭を京都から追放する
8～9月	朝倉義景・浅井長政を滅ぼす
天正2年（1574）9月	長島一向一揆を平定する
天正3年（1575）5月	武田勝頼を長篠の戦いで破る
天正4年（1576）2月	安土へ移る
天正10年（1582）6月	本能寺の変で自刃

□は岐阜在城時

▲長篠合戦図屏風（大阪城天守閣蔵）　天正3年（1575）、長篠・設楽原（現・愛知県新城市）において、織田・徳川連合軍と甲斐の武田軍が激突。武田騎馬軍に対し、織田軍は全長2kmとも言われる馬防柵を築く一方、1,000挺もの鉄砲隊に攻撃させて勝利を収めました。有名な「三段撃ち」は後世に誇張されたもので、交代で鉄砲を射撃するのは戦国時代の常識でした。

信長公の版図拡大



岐阜を拠点に各地へ出撃を繰り返していた

信長公、永禄13年（1570）には越前（現・福井県）の朝倉義景を討伐するため出兵しましたが、北近江（現・滋賀県）の浅井長政の裏切りに遭って撤退しています（金ヶ崎の退き口）。

幾度も窮地が訪れますが、信長公はそれに屈せずたびたび自ら出陣し、「姉川の戦い」「伊勢長島攻め」「長篠の戦い」などでの勝利をきっかけに、勢力を拡大していきました。天正4年（1576）に安土へ移る時には、美濃から畿内にかけて日本の中央部を支配下に置き、また軍団を整備するなど、さらなる勢力拡大への布石を打っていました。

「岐阜」と命名

岐阜が地名として広く使われるようになったのは、信長公が入城してからです。江戸時代に編さんされた『安土創業録』は、沢彦宗恩（たくげんそうおん）という禅僧が「岐山・岐陽・岐阜」の3案を提示し、信長公が選んだと伝えています。3案とも、土岐氏が美濃を支配していた時代に禅僧たちが使っていた呼び名でした。

当時の人々がこの中国風の地名をどのような意味として受け取っていたのかはよく分かっていません。しかし、天正元年（1573）に岐阜を訪れたある貴族は、岐阜を「蓬莱（ほうらい／仙人の住む理想郷）の意味であると理解していました。

岐阜はユートピア思想をはらんだ言葉で、中国・周の文王と武王が理想的な国家を造り上げた拠点「岐山、孔子が生誕した儒教の聖地「曲阜（きょくふ）」を連想させるものであったことは確かでしょう。

「天下」を時代のキーワードに 信長公を飛躍させた岐阜の文化

永禄10年11月、信長公は「天下布武（てんかふぶ）」の印を使い始めます。印そのものは、美濃を領国に加えた信長公が大量の文書をさばくためのツールです。それまでは、原則として信長公自身がサイン（花押）することによって、文書が正式なものになるという仕組みでした。信長公のサインとしては、永禄8年から使い始めた平和な世の中に現れる幻想獣（麒麟（きりん））の「麟」の字をデザインしたものが有名です。→❶

「天下布武」の4文字に込めた信長公の想いも、「武家が天下を取る」「武力で天下を平定する」といった単純なものではなかったように思われます。「天下」という言葉を武家文書の中で使う文化は、戦国時代の尾張にはなかったのです。美濃でもようやく永禄4年（1561）に一部で使われるようになりました。

◀❶信長公の花押（美江寺蔵）

◀❷信長公が「天下布武」印を使った最初の文書（部分）〈名古屋市秀吉清正記念館蔵〉

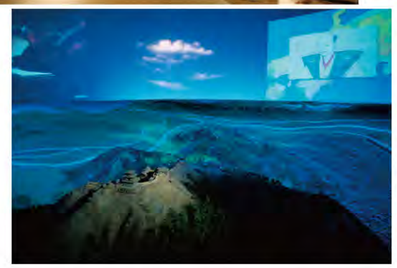
その契機となったのが、信長公のライバルでもあった斎藤義龍が美濃の禅僧たちと対立した事件でした。斎藤家の家臣として禅僧たちとの交渉役を務めた武井夕庵（たけいせきあん）が、「天下」という魔法の言葉で、身分的に上位にある者さえも牽制できることを学んだのです。

信長公が「天下布武」印を最初に捺（お）した文書→❷や、「天下」という言葉を文中に初めて使った文書を実際に筆で書いたのも夕庵でした。信長公は夕庵を介して、「天下」という言葉を自由にさまざまな意味で使いこなす術（すべ）を身に付け、「天下」は時代のキーワードになったのです。

信長公に仕えた時点でかなり高齢であった夕庵が厚遇されたのは、単に文書を書く右筆（ゆうひつ）として有能だっただけでなく、信長公の「天下」ヴィジョンを支えたからに違いありません。

尾張の戦国武将・信長公を天下人へと飛躍させたのは、岐阜の文化だったといってもいいでしょう。

岐阜市歴史博物館の❹楽市立体絵巻（左下）　フロイスが「バビロンの混雑を思わせる」にぎわいだったと記した、信長公時代の岐阜城下町を体感できます。



「楽市楽座」で経済政策を推進 現在も岐阜城下町の面影が残る

❸楽市楽座制札（国重要文化財）〈円徳寺蔵〉

市内の円徳寺には4枚の楽市楽座制札が伝えられています。そのうち、実際に市場に掲げられたのは永禄10年10月に信長公が出した1枚だけです。→❸

中世の独占的商業集団であった「座」に加わらなくても自由に商売ができる権利は、中世の市場が持っていた属性です。他の戦国大名がそれを認めた先行事例はありますが、信長公が岐阜の楽市令で真っ先に求めたのは、第一条で掲げたように、この市場への来住者だったのです。信長公は市日だけにぎわう中世的な場ではなく、住民がいて宿もある都市的な場をつくろうとしたのです。

第二条以下では、市場での押買（おしかい／強引に商品を買いあさる行為）・乱暴・狼藉（ろうぜき）を禁止するだけでなく、住民には信長公の領国を自由に往来でき、借金やさまざまな税金を免除するなどの特権を付与し、戦乱で荒廃した城下町を振興するための時限立法として活用したのです。

永禄12年、岐阜を訪れたルイス・フロイスは、信長公の館からかなり離れた場所に宿をとります。そこでは、商人たちがいきいきと活動していました。そこで、フロイスが泊まったのは信長公が制札を掲げた楽市場であったと考え、大胆に復元したのが、岐阜市歴史博物館の楽市立体絵巻です。→❹

この市場は御薗（みその）の地区にあったと考えられ、市神として榎（えのき）が祀（まつ）られていました。当時の榎は枯れましたが、その後に植えられた榎は位置を変えて現在も残っています。→❺

❺御薗の榎

信長公が岐阜に移ると、信長公に仕える重臣や馬廻（うままわり／警護役）たちも岐阜に屋敷を構えるようになりました。また、法華寺（矢島町）や誓願寺（伊奈波通1丁目）など尾張から移転してきた寺院も、市内に多数残っています。

信長公が築いた岐阜城下町は

嫡男・信忠に引き継がれます。本能寺の変後、三男・信孝が城主となりますが、天正11年（1583）羽柴秀吉に滅ぼされた際、岐阜町も焼失してしまい、その後に入城した池田之助や池田輝政も改めて楽市楽座の制札を出しています。その後、信長公の孫・秀信が最後の城主となりました。慶長5年（1600）関ヶ原の合戦では、岐阜町はほぼ無傷で存続、土塁と堀で囲まれた城下町の面影を残したまま明治を迎えました。現在も旧市街の主要道は信長公の時代にさかのぼるルートを拡幅して使っていますし、梶川堀などの水路は一部路面に隠されていますが、現在も脈々と生き続けています。→❻

多彩な「もてなし」の心を持つ信長公

永禄12年（1569）、京都での布教の許可を得るため岐阜を訪れたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、山麓の居館について詳細な記録を残しました。山頂部にも招かれ、信長公は自ら食膳を運んでフロイスを驚かせています。客人に対しては身分の上下に関わらず自らもてなすのが信長公の特徴です。

同年、岐阜を訪れた山科言継（やましなときつぐ）の日記からは、信長公が姑（しゅうとめ／道三公の妻）へ礼に出かけることもあったと分かります。正室の実家にも気を遣いながら信長公は岐阜で生活していました。信長公はあまり他人のことは気にしないというイメージもありますが、細やかな「もてなし」の心を持っていたのです。

❽鷹狩（諏訪流放鷹術保存会提供）

天正2年（1574）、堺の商人・津田宗及（つだそうぎゅう）を迎えた際、信長公は茶室に柳を活け、食事のおかわりを自らよそい、酒をついでいます。この時の料理には生白鳥を使ったものもありますが、本膳の一番のごちそうは雉（きじ）の焼き鳥でした。→❼

雉はさほど珍しくなかったはずですが、鷹狩で捕った雉は極めて貴重な食材になりました。信長公は鷹狩が趣味ですし、信長公が捕ったものだからこそ一番のごちそうになったのでしょう。→❽

❼信長料理復元模型　信長公は津田宗及を茶会や料理でもてなしました。この時のメニューを、宗及の記録を元に、茶屋四郎次郎記念学園（中島範氏・堅山翠氏・和田恵美子氏）が復元したものです。地元の川魚など食材は多岐にわたります。

同年、伊勢長島攻めの最中、奥州から鷹が到着したという報告が本陣に届きます。なんと、信長公はいてもたってもいられず、鷹を見るため陣中から岐阜に引き返しています。

元亀3年（1572）2月13日、信長公は達目洞（だちぼくぼら）で鹿狩りをすると宣言。狩りが行われたのは18日で獲物は78頭、自ら弓で狩りを楽しみました。それまでの間に家臣たちが周囲から鹿を追い込んでいたのでしょう。

江戸時代の『甲陽軍鑑』という書物には、

信長公が岐阜で武田信玄の使者・秋山伯耆守（あきやまほうきのかみ）を歓待したという記事があります。信長公は伯耆守にごちそうをふるまい、能や鵜飼を見せています。鵜飼は共に船上から観覧し、鮎を自ら選んで伯耆守に手渡したとのことです。鵜飼も鷹狩と同じく、動物を使って野生動物を捕らえるもの。信長公がそれに価値を見出し、接待に利用していたとの推測も可能かもしれません。

国史跡「岐阜城跡」が誕生します

昨年11月19日に開かれた国の文化審議会で、「岐阜城跡」を国史跡に指定する答申が出されました。斎藤道三公が造り、織田信長公が受け継いで天下統一の拠点とした岐阜城が、日本の歴史・文化を考える上で高く評価された結果です。

指定範囲は、現在、発掘調査を行っている織田信長公居館跡を含めた金華山国有林一帯で、面積は約209ヘクタールです。これまで岐阜城といえば、山頂の天守閣だけが注目されがちでしたが、今回、山麓の居館跡や自然地形も含めて城として機能した金華山全体が指定対象となりました。

今後、事務手続きを経て正式に指定され、国史跡「岐阜城跡」が誕生します。

国史跡指定と織田信長公居館跡発掘調査に関する問 社会教育課(内線6357)

「岐阜城跡」の範囲

史跡申請に先立って実施した遺跡分布調査では、石垣の痕跡(こんせき)や平坦な場所がいくつも確認されました。このような場所は眺めの良いところが多く、見張りのための砦(とりで)があった場所ではないかと考えられています。七曲道、百曲道、水の手道などの登城路は、現在も登山道として使われています。

岐阜城の歴史

岐阜城(稲葉山城)の築城は建仁年間(1201～04年)ごろと伝えられていますが、詳しいことは分かっていません。中世を通じて宗教施設が存在していたようで、発掘調査でも「大寺」と書かれた土器や梵鐘(ぼんしょう)の鋳型(いがた)などが確認されています。

伝承では、道三公が付近にあった伊奈波神社を移転させ、ここを拠点に城下町の建設を行ったとされており、その年代は天文8年(1539)ごろといわれています。その後、信長公は、永禄10年(1567)に稲葉山城攻めを行い、小牧山城からこの地に本拠を移しました。信長公は岐阜に足かけ10年在城した後、嫡男・信忠に譲り、自らは安土城に居を移します。以後、城主がめまぐるしく交代しますが、慶長5年(1600)、信長公の孫・秀信が城主の時、関ケ原の戦いの前哨戦で岐阜城は落城、以後廃城となります。

城を失った岐阜の町は、幕府直轄領を経て、元和5年(1619)に尾張藩の管理となりました。金華山は尾張藩主の「御山(おやま)」として一般の立ち入りが禁止され、奉行所に山廻り同心が置かれて普段の見回りに当たりました。歴代藩主が岐阜を訪問した際には、鵜飼見物とともに登山や鹿狩りなどが催されています。

明治時代に入ると一般にも開放され、明治21年(1888)には歴代城主の館があった山麓に岐阜公園が開設されます。山頂には明治43年(1910)に日本初となる模擬天守が造られました。残念ながら昭和18年(1943)、失火により焼失しましたが、昭和31年(1956)に鉄筋コンクリート製の天守が再建され、現在に至っています。

岐阜城の城域

岐阜城は山上の城郭部分と山麓の居館跡、それをつなぐ登城路と山中の砦(とりで)跡などから成り立っている山城で、金華山の険しい自然地形も天然の要害として機能していました。つまり金華山(稲葉山)＝岐阜城であり、山全体が城であったといえるでしょう。

ではどこまでが岐阜城の城域だったのでしょうか？直接の城域は江戸時代に尾張藩領になったようです。江戸時代の絵図にはそのエリアが描かれていますが、それは現在の国有林の範囲とほぼ同一です。江戸時代には尾張藩、明治時代には宮内省、戦後には林野庁が管理してきた金華山の範囲は、実はかつての岐阜城の城域がそのまま引き継がれているのです。

▲岐阜町絵図(岐阜市歴史博物館蔵)　江戸時代の岐阜町と周辺の山々を描いた絵図です。緑で色分けされた尾張藩管理の山は、史跡指定範囲とほぼ同じエリアであることが分かります。

◀山頂に残る石垣　二の丸の奥にある「本丸井戸」の上を見上げると、立派な石垣が目に入ります。山頂部にはこうした戦国時代の石垣が残る場所がいくつもあります。

岐阜城跡の歴史的価値

岐阜城跡の歴史的価値をまとめると、以下の3点に集約されると考えられます。

①織田信長公が天下統一の拠点とした城であること。
石垣の使用など後の安土城や近世城郭につながる要素を持っており、中世から近世への転換期にあたる日本史上重要な城といえます。

②ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスらの詳細な記録が残されていること。
文献の記述と遺跡の対比ができる点でも稀有(けう)な遺跡といえます。

③日本庭園史の中でも貴重な庭園跡が見つかっていること。
山麓では自然地形を生かして全体的に「見せる」ことを意識した造りとなっています。検出された庭園遺構は室町将軍邸の庭の系譜につながる可能性もあります。

信長公によるまちづくりを進めています

信長公が岐阜で遺した足跡に学び、現代そして未来のまちづくりにつなげようと、市ではさまざまな分野で取り組みを進め、その魅力を全国に発信しています。

昨年、信長公が居城を構えた愛知県清須市、同小牧市、滋賀県近江八幡市と連携し、広域的な観光振興を目的に「信長公居城連携協議会(愛称〝信長の夢街道連合〟)」が設立されました。また、岐阜公園について、「信長公の鼓動が聞こえる歴史公園」として整備を進めており、今後、織田信長公居館跡を中心とした保存と整備の実施を目指しています。

進行中！「信長学推進プロジェクト」

「信長公によるまちづくり」の一環として、「信長学推進プロジェクト」を進めています。信長公が岐阜の地にさまざまな絵画や茶道具の名品を集結させたように、信長公に関する多様な情報を岐阜に集積し、信長学を立ち上げることが目的です。

「信長学のメッカ」を目指し、市民の皆さんが楽しく分かりやすく理解を深める機会として「信長学フォーラム」や歴史講座「信長塾」を開催し、好評を得ています。

また、信長資料集編集委員会を組織し、歴史博物館と連携して、信長学の基盤となる調査・研究に平成21年度から5年間かけて取り組んでいます。信長公に関する近代以降の論文やエッセイなどの文献を集めた『信長文献目録』、信長公に伝承のある遺品をグラフィックにした『図録信長』、信長公の生きた時代の文書や日記を中心にしてその生涯を追いかける『信長史料集』を順次編集し刊行する予定です。●調査・研究について詳しくはホームページ(http://nobunagagaku.com)をご覧ください。

問 歴史博物館☎265-0010

織田信長公居館(きょかん)跡発掘調査

中心施設は豪華な建物？ 今年度は金箔を貼った瓦片などを発見

現在、山麓にあった織田信長公居館跡の全体像を明らかにするための発掘調査(第4次調査)が行われています。これまでに巨石列や石垣、建物の礎石の他、庭園跡などが見つかりました。中でもB地区の一番奥で見つかった池の構造や立地は、室町幕府8代将軍足利義政の別荘「東山殿(ひがしやまどの)」(銀閣で知られる現在の慈照寺(じしょうじ))や西芳寺(さいほうじ)と似ています。室町将軍邸の庭を真似たのでしょうか。革新的なイメージが強い信長公ですが、将軍家の伝統や権威を継承しようとした一面があったことをうかがわせます。

庭園は戦国時代でも〝もてなし〟の装置として重要ですが、見つかった庭園は自然地形の岩盤を背景にして造られており、まるで全体が庭園で、その中に建物が点在するような構造をしています。いわば全体が客人をもてなす迎賓館のような役割を持っていたのかも知れません。

また今年度は、C地区の建物に使われていたと考えられる、金箔(きんぱく)を貼った瓦片が見つかるなど、中心施設の豪華な建物の一端が明らかになりつつあります。

「アルカラ版イエズス会士書簡集」(岐阜市歴史博物館蔵)より

織田信長公居館の構造模式図【上】と地形復元模型【左】
信長公居館は奥に行くほど高くなる階段状の地形に立地しており、それぞれの平坦地に建物などがあったようです。これまでの調査成果からみると、どうやら単純な4階建てではなかったようで、現時点ではフロイスの記録にある1階部分は複数の平坦地にあった建物群で、2階以上の部分が谷の奥(B地区)にあったと考えられています。

見つかった遺物

【B地区】見つかった池の跡

岐阜公園最大の巨石列

【B地区】礎石と焼けた壁土の層

●発掘調査の様子をブログで公開しています →http://www.nobunaga-kyokan.jp/

調査成果や史跡紹介のほか、ゲーム風遺跡紹介(写真)や、岐阜女子大学の皆さんが製作した発掘現場の360度パノラマ画像などの新コーナーが登場しました。ぜひご覧ください。

ルイス・フロイスの記録

【参考文献】『アルカラ版イエズス会士書簡集』岐阜市歴史博物館蔵

ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、永禄12年(1569)、信長公に会うため岐阜を訪れています。彼が書き残した手紙や著書『日本史』からは、金華山の山麓にあった4階建ての豪華な「宮殿」の様子をうかがうことができます。

●山上部の記録

城の入り口にはある種の堡塁(ほるい)のようなものがあり、そこには絶えず15ないし20人の若者がいて、昼夜見張りに立ち、ある者が他へ替われば他の者がやってきました。城へさらに上ると、入り口の次に2～3の座敷や部屋があり、信長の領国における主立った諸侯の若い子息、年令12歳から15歳の者約100人がいました…

彼は、次男をやって茶をもってこさせ、私に初めの磁器(の碗)を与えて、自分は別のを飲み、そして三番目をロレンソに与えました。次に私に美濃と尾張の国の大部分を見せましたが、城から見えるのはすべて平野でした…

●山麓の「宮殿」の記録

内部の部屋は大広間はクレタの迷宮であり、すべてが巧妙に思いのままに作られていました。…広間の最初の廊下には15か20の座敷へといたりますが、これらは屏風で飾られた部屋です。…廊下の外側には5～6の美しい庭があります…。

2階には大部屋と奥方の部屋があり、その侍女の部屋がありますが、階下よりずっと優れています。

3階は山側へと、通路で同じ高さでつながっており、チャと称する粉末でできたものを飲む立派で美しい部屋、すなわち茶の座敷があります。…3階と4階の見晴らし台からは町の全体が見えます…